

上を隔八丈島あり。如是小島多きゆへに大島の名ある歟。開闢以來千餘年の。星霜を経さいへとも。糧乏しきゆへか。住人いまだ稀にして。一食にして命を續くさいへり。かゝる難所さいへとも。行者少しも厭ひたまはず。晝は島に在て。秘呪を持誦して禁を守り。夜は必ず富士の峯に登り。龍樹菩薩にさつかり玉ふ。眞言の密法を行ひ。黎明におよんで島に歸り玉ふ。海を踏で走る事。陸を行が如しまたその速き事。飛鳥も及べからず。行者は幼年より。四天王天蓋を持て。守護し玉ふゆへ。雨衣を濕さず。今は通力自在の神仙なるによつて。雲を踏風に乗じ玉ふゆへ。風雨はさらに厭ひ玉はず。これによつて。一日の懈怠もなく。富士の高根に通ひ玉ふ事。既に其年も暮れ。明れば。文武天皇の四年さはなれり。母公は呵責を免れ

茅原の里にかへり。行者の事のみ按じ煩ひ玉ひしに。豆州大島へ配流せられしと。聞玉ひしより。悲歎に臥し。終に病根さはなれり。年月を累今は。重き病さはなりける。行者は神通力をもつて。母公の病に臥し玉ふをしろしめし。茅原の里に飛來し。母公の枕邊にそひて。介抱して仕へ玉ひ。種々に心を配て。老の病苦を慰め玉ふこと老來子も及べからず。然りさいへとも。勅勸の身の上なれば。他聞を憚り。朝は島に還り。夕は里に來て。母公の御傍を離れず。慙につかへ玉ひける。爾時文武天皇。五年の春さなりて。天武天皇の。朱鳥以來。持統天皇の御世十一年。當今の御世五年。合して十六年のあゐだ。中絶したる年號を。始て立て大寶とし玉ふ。是より大寶元年と號す。爰に韓國廣足讒言をかまへ。行者を遠流の罪に。

陥るごいへごも。飛行自在の神仙あれば。廣足心易からず。流罪に  
 行ひし後島の行状を。窺んごすれごも。遙の海上を隔たれば。力及  
 はず。依之茅原の里へ間者を恐ばせ。母のやうすを窺せける然るに  
 行者は孝心淺からず。夜毎に母のもとに來り仕へ玉ふ事。年月を累  
 けるゆへ。終に里人は是をしりて。大に感じ且其神通を畏れ。謗るに  
 はあらねごも。竊に語りあひけるを。間者ごもに洩聞へければ。よ  
 き事におもひて。是を告げれば。廣足大によろこび。間者に褒美し  
 て。また茅原の里へしのばせ。其身は急ぎ參内し奏聞し奉るは。役  
 小角通力自在にして。勅命を輕じ晝は大島に在ごいへごも。夜は高  
 峯絶嶮の地に飛來し。鬼魔の類ひを集め。惡計をめぐらし。或時は  
 茅原のさごに來て。母に仕るよし。訴る者あり。實に謀叛の望なき

者ならば。勅命を畏みて。島に慎みあるべきに。自在に飛來し宮中  
 を蔑にする事。言語同斷重罪免れがたし。生置は災の種を植るか如  
 し。速く死罪に行はるべしご。讒言におよびける。諸卿一統廣足が  
 佞辨にまよひ。いかなる變事にや及ばんご。大に周章此よしを。叡  
 聞に達し玉へば。帝大に逆鱗し玉ひて速小角を誅戮すべしご。勅を  
 下し玉ふ。依之急ぎ。大島へ勅使をつかわさる即勅使兵を駈して大  
 島へ渡り。行者を召出し。勅命を申達す其詞に曰く。遠流の制禁を  
 破り。自在に飛行し。惡計を企るのよし。叡聞に達す。依之殺刀を  
 下さるごなり。行者答玉はく。惡計を企るにあらず。富士の高峯に  
 登ては。天下泰平を祈又母の病あるをしつて。茅原の里に行事。遠  
 流の制禁を破に似たれごも。嘗て破らず。夕べに行て朝に歸り。晝

は島に在り。是制禁を守るゆへなり。然りと雖。讒を信じ。紀明もなく。死を玉ふ事。仁慈に洪たりといへども。天命なんぞ辭する事を得んこと。速に座し。頭をのへて殺刀を待玉ふ。勅使下知を傳へ玉へば。太刀ごりの者行者の後に立まわり。既に太刀をあげんことして忽ち眼闇んで顛倒す。勅使大に怒て太刀ごりの者をかわらしむ。則太刀をさつて立かゝり。同く眼くらみて尻尾に臥す。又代りて。進み奇るもの。同く太刀をさりおとし。斷事あたわす是のごくする事。三度に及さいへども。殺事あたはず。勅使をはじめ皆一統に奇異のおもひをなし。急ぎ歸洛し。不思議のよしを具に。奏聞におよびければ帝をはじめ奉り。一統大に驚玉ひ。猶おぼしめす旨ありて行者に殺刀を下さんさせし。時日を尋玉ふ。則十月二十五日巳の上

刻なりと。勅答奉る。依之いよく不審に思召事あり。使使都を出立の日より。韓國廣足病に臥し。二十五日己の上刻。病中の夢に。四天王銚を持して天降り。廣足を責て曰。豆州大島におゐて。役行者今既に殺刀を蒙んごす。是皆汝が讒言によつて。罪なふして危きに臨むさいへども。諸天善神行者を哀れみ助て。汝が罪を責玉ふ。いかにく銚をあげて擲玉ふ。廣足おそろしき事限りなし。其苦腦にたへかね。聲を發しける故家内の者うちよりて介抱す。依之夢は覺たれども。五體崩るゝが如にして。九死一生の病さはなれり。是同日同刻なる事。不審千萬なり。かならず神佛の冥慮なるべし。それよりして廣足七晝夜の苦しみ。無間地獄の呵責も是あらんと思ふばかりにして。終に死したり。帝御心易からず思召。博士に命じ

占はせ玉ふ。則謹て卜して勘文を奉る。其詞に曰く。天皇宜欽崇玉ふべし。是凡人にあらず。大聖人なり速く免し。都に迎へ尊重供養して。心にまかせ玉ふべしと云云依之小角謀判を企し歟。廣足が讒言なる歟決しがたく叡慮を腦し玉ふ。爾時諸卿一同に奏し玉ひけるは。母を宮中に召おかれその後小角を免し玉ふべし若小角惡謀を企る事あらば。其時母を嚴しく責て小角を懲し玉へとなり。是に一決して直に。茅原の郷より行者の母を召奇玉ひける。爰に一ツの御疑ひあり。小角は母あれども。父の名を知る者なし。何者の子なる歟。尋問べしと。勅命を蒙り。則老母を召て小角の父は何人にてありし哉と尋玉へば。老母答玉ふは。或時一ツの獨股杵天降りて口中に入と夢見てより孕しゆへ。父はなしと申玉ひければ。彌々疑

ひかゝり。是必偽りならん。両親夢見て孕さいへる歟または。夫ありて夢見てはらめり云へ。權化とも云べきなれども。夫なく孕しと云は。深き謂旨あつて秘するならん。強て問玉ふ。老母答て。白地には申がたし免し玉へとありければ。猶々免し難しとて。責こひけるゆへ。老母は其苦惱にたへかね申へき事あり。須更あるし玉へと。歎き玉ふ。依之其呵責をゆるめければ。老母謹て曰く。母あつて父なき事疑玉ふも。道理なれど。憚る事ありて慎みしが。勅問とあれば辭しがたし。恐れながら申し上ん。若かりしとき。彌生なかばの事にてありしが。舒明天皇茅原の里に行幸し玉ひ。鷹を放ちて御遊ありしが。其時俄に雨降出しければ。我館に入御あり。猶湯をめし玉ふといへども。父は無位無官の身として。玉座近く參事を

恐妾をして湯を奉りける。妾は拙なれども。御心にかなひしや。其  
 時唯一度の恩幸を蒙りしが。それより常ならぬ身ごはなりける。御  
 胤なりご。披露せん事恐れある也へ。天より獨股杵下りしご偽り。  
 月満て男子をうめり正しき天子の御落胤なれども。賤の女の胎に。  
 やごり玉ふ也へ。匹夫のうちに入玉ふ事の。甚悲しくてありけれご  
 も。君の御名を穢し奉ることの。恐れ多く。六十九年の其間口外へ  
 いださぐりしが。今日勅命の御尋辭する事かなはず奏し奉るなりご  
 具に述玉ふ。是を聞大ひに驚夢の覺たる如く急ぎ此よしを。奏し奉  
 りける。文武天皇不容易事なりご。叙慮をめぐらし玉ふに。今度博  
 士の勘文に。大聖人なりごありしは。此故なる歎。されば廣足が讒  
 言にてありしかご。行者の御疑ひ晴れ。急ぎ老母を。茅原の里にか

へし。速く小角をめしかへし。罪なきよしを申すべしご。命じ玉へ  
 ば一同に畏みて。直に老母を送りかへし。大島へ勅使を差向らる。  
 勅使は急ぎ都を立て。豆州に着し順風を待て島に渡海し。行者を尋  
 るに。邊に見へず。山中に分け入れれば。行者は石上に座して。秘  
 咒を持誦し玉ふ。勅使見を見畏みて。進寄玉ふ。爾時行者は。神通  
 力をもつて。勅免の御使なる事を知しめし。石座を下りて迎へ玉ふ  
 勅使は禮をなし勅命を達す。其詞に曰く。廣足が讒言なる事顯れ。  
 行者の流罪赦免し玉ふなりごありければ。行者謹て勅免を蒙り。則  
 勅使と同船し。纜を解ひて。加茂郡に渡り。日を経て歸洛し玉ふ。  
 勅使は行者歸洛のよしを奏し奉る。文武天皇行者の。神通自在なる  
 を。叙感淺からず。參内を免し玉ふといへごも。行者は堅く是を辭

し玉ひ。茅原のさごにかへりて。母上につかへ玉ふ。是より後は天  
 下一統。行者を尊敬する事。以前に百倍せり。文武天皇御心易から  
 ず。舒明天皇の御落胤と云。ここに正行の役小角を。廣足が讒言に  
 迷はされ。罪なきを遠流せし事朕が不徳なり。速く小角を召寄せし  
 ご命じ玉へば。早々茅原の里に行て。勅命を達といへごも。行者元  
 來。官位昇進望みなし。依之畏れれごも。勅命を辭する事。末世の  
 衆生を化度せん事を。願ふのみなり。免し玉へご。堅く辭し玉ふ。  
 此故に勅使力およばず。都にかへり此よしを。奏し奉りける。文武  
 天皇いよく。行者の徳を感じ玉ひて。再勅使をつかわされける。  
 行者は神通力をもつて。勅使の來を知り。再三の勅命を蒙ば辭し難  
 しご。母公ごごもに。箕面山へ隠れ玉ふ。勅使は是をしらず。茅原

に行て尋るに。行者は見へず。大に驚里人を召て問玉へば。老人ご  
 も詞をそろへ。行者は飛行自在にして。われくの知事にあらず。  
 然れごも。是按るに攝洲箕面山へ行玉ふならんさいへり。勅使尤な  
 りご。直に箕面山へ急ぎ玉ふ。行者は是をしろしめし。此後は入唐  
 せん事を發心して。まづ徳善大王の社前に。入唐の旨を啓し玉へば  
 大王別離をおしみ玉ふ歟。社内より猛火さかんに燃出る。爾時行者  
 一度咒し玉へば。忽に消うせけり。是より行者は草座にざし母公を  
 鉢に座せしめ。大唐國へ飛去り玉ふ。却説勅使は箕面山に登り玉へ  
 ご。飛行し玉ひし後なる由へ。彌ちからおよばず。是の通り奏し奉  
 れば。帝も御心残りに。思召けるごなむ。因に日道照和尚入唐して  
 所々の靈地を順禮し。新羅寺に住し。法華經を講讚す。神仙多く來

りて。聽聞する。中に第三の神仙和國の語をもつて。論議を發す。道照和尚問て曰。本國の語を以て。疑ひを擧るは誰人なるや。答て曰日本國役優婆塞行者なりと。和尚則座を下て本國の事を語りける行者曰く我此土に來て住さいへども。年毎に本國に往來し。三つの峯に練行す。是本國の恩を忘れざる故なりと。是を聞て道照涙を流しけるさいへり。按るに三つの峯とは。金剛山。金峯山。富士山なるべし。文武天皇大寶元年行者御年。六十八歳にて。唐土へ飛行し玉ひ。今千五百五十年の。後世さいへども。日本に往來し。信心堅固の所には。靈驗をあらわし玉ふ。神變大菩薩の御威德。尊さきことになむありける

附 錄

吉野山千本櫻の話

並補正成候武德之話

吉野山千本の櫻さいへるは。峯々谷々にみちくして。ひさめに見ゆる春の色は。たくひなきながめにて。雅俗に通じ。貴賤のへだてもなく。また散際の。すみやかなるをもて。花の主さもいへり。又種々の花ありて。紅ひのいろをなし。童蒙の眼をよるこばしむさいへども。散ぎわの甚拙さゆへに。人は武士花はさくらさきと。賞美して古きうたに

散てこそ。いこゞ櫻は。めでたけれ

ありて世の中。はての憂けれは

かくよみしは。深きこゝろのある事になむ。その櫻にまさる楠侯の  
 此山に皇居を遷し玉ふも。皆役行者の御威徳なればとて。帝もふか  
 くよろこび玉ひ。おふくの櫻を植させ。永く權現への手向とし玉ふ  
 その由來を尋るに。人皇九十五代の帝。後醍醐天皇と申奉るは。萩  
 原院の文保三年に。御位に即玉ひ。文保を改めて。元應と號し玉ふ  
 爾時鎌倉は十代將軍。守邦親王なり。執權北條相模守高時は。時政  
 より九代にあたつて。武威を耀し奢に長じ。天子を始め奉り。將軍  
 家をも蔑にす。依之秋田城之介時顯諫言再三に及こいへども。さら  
 に用ひず。長崎入道圓喜同新左衛門高資なごいへる。佞臣を愛し。  
 我意に募り。天下の政を擅にす。長崎父子は。上に諂ひ下を掠め  
 傍若無人の振舞あり。爾時後醍醐天皇の御子。恒良親王を。東宮に

立玉ふのよし。鎌倉に宣旨を下さる。高時是を違背して。後二條院  
 の御子。邦良親王を。東宮に進め奉る。餘は是に順ひ。宮中の事こ  
 いへども都て鎌倉のはからひこはなれり。帝是をふかく惡ませ玉ひ  
 萬里小路中納言藤房卿。日野中納言資朝卿。二條中將爲明卿。右少  
 辨俊基卿。土岐左近頼員。其外五三人を召て北條高時を亡さん事を  
 密計に及ばれ。山門寺門南都十津川熊野三の山の。荒法師を招き。  
 其後諸國の武士を。召寄らるべきに決せらる。然るに土岐左近頼員  
 は鎌倉の威勢に恐れ。六波羅へ忍び行常盤駿河守へ密通に及びける  
 駿河守大におごろき。兵に命じ。直に日野中納言資朝卿。右少辨俊  
 基卿。二條中將爲明卿を。からめ捕て。鎌倉へおくり。密計のおも  
 むきを訴ふ。高時大に怒て密計の始末を問こいへども。三卿口を閉



てさらに答へ玉はず。高時忿怒して。左右を見まわし。長崎新左衛門高資に命じ。下郎の手に渡し。強問に及べし。きびしく下知を傳ふ。高資元來禮儀を辨へぬ田舎武士。ここに佞肝の癖者なれば。高時の下知にしたがる。三卿を庭上に下し。下郎に命じ。責問さいへども。一言も發玉はず。二條中將爲明卿。やうく詞をはつして

おもひきや。わがしき島の。道ならで。

憂世の事を。さわるべきとは

是よみたまへども。其意を辨ふ者もなく。猶々つよく。責問けるこそ哀れなり。秋田城之介時顯是を聞。大に驚き高時を諫ていへらく高位の貴人を下郎の手に下し。呵責する事。以ての外的事なり。ま

た東は夷にて。和歌の心も。辨へざる歎と謗りをうくる事。北條家の恥にあらずや。速く免し玉へ。席をうつて諫ければ。是非なく責を免して。獄屋に繋ぎける。却説都には。三卿の囚れとなり玉ふによつて大に騒動し。叡聞に達しけるゆへ。御心を腦し玉ひ種々に評じ玉ふさいへども。何れも力およはず。唯密計の洩聞ん事をのみ勞し玉ひける。爰に萬里小路藤房卿は。鎌倉に下向して。高時に理解して。三人の囚れを救ひ來らん。進みいで、願玉へば。帝をはじめ。諸卿一統。危き事に思召けれども。藤房卿はしめて願ひ。急ぎ鎌倉へ下向し玉ひ。日を累て。鎌倉に着し。宣旨の御使なりとありければ。高時聞之て。武威をもつて。取控ん事を謀り。まづ旅館に休息を進め置。對面の用意を專にす。書院の上座には。勅使の席

を設け。向ふ座には。北條高時次には。長崎入道圓喜。同新左衛門高資。秋田城之介時顯。其外一門三十八人。武士三百六十人列座し旅館へ迎ひをつかわしける。萬里小路中納言藤房卿は。早速に登城し。席に進み玉ふ。左右列座の武士は。肩をならべて。嚴重にひかへたり。藤房卿は上座になおり。勅命のおもむき申渡ん。謹で拜聞あるべしと。勅書を捧げ。仰渡さるゝは。今度鎌倉へ召下す三人は。皆殿上人なり。奏聞におよばず。武威をもつて召捕る事。天位を恐れざるはからるなり。速に送りかへすべしとの。勅命也とありければ。高時すこしも恐るゝいろなく。疑はしき事有之によつて。召捕て尋聞におよぶ。是皆天下泰平の爲なり。天下の政道は奏聞におよばず。鎌倉におゐて。執はからふ事。高時の私にあらず。後白

川院より。頼朝將軍へ。六十餘州總追補使たるべしと。政事を預け玉ふゆへなり。去れば今。高時のはからひを。妨げ玉ふは。先帝の勅定を。破らせ玉ふの理にあらずや。藤房卿曰く。疑はしき事あらば。奏聞におよび。糺明あるべきなり。後白川院より頼朝將軍へ總追輔使を。免し玉ふとも。我意をもつてせよとは。免し玉ふまじ。また此度うたがわしきと云は。如何なる事ぞや。高時答て。此度の疑ひは。天下の爲なり。天子御謀叛の御企有之事。慥に内通の者ありといへども。猶徴細を尋いよく世の乱を發し玉は。遠島に遷し奉り。天下泰平の基を聞ん事を計るに。奏聞に及べきや。是のごとき政道を。妨んごし玉ふは。必定謀叛の一味ならむ。速く歸京して。此由を奏聞におよび。企を止め奉るや。左なくば。からめ捕て

獄屋に繋つなぐいかでや。いかにご。言語同斷ごんごのありさまなり。藤房卿は優々ゆうけい緩ゆるとして。不審返答ふしんたいとうをきくものかな。天子に御謀叛ごぼうはんの企けありごは。何れを亡ほろし玉ふや其意を得とりごありければ。北條高時怒いかをあらはし御謀叛ごぼうはんの御企ごけをしらぬてゐに云まぎらし。辨舌べんぜつ振ふるひ逃のがれごはかるごもかなふまじ。其亡ほろさんごの御目的ごてきは他たにあらず。鎌倉將軍しやうぐん並執權ならびしつけん北條きたうやご。云終いいたはらざるに。藤房卿とうぼうけい忽たちまち忿怒ひんぬの色いろをなし。天子に御謀叛ごぼうはんありごは。恐おそれおふき申條まうじょうなり。神慮しんりょに叛そむき謀はかり玉ふ事あらば御謀叛ごぼうはんごも云べき歟。鎌倉將軍しやうぐん執權しつけん北條きたうなご。奢たかに長ながじ。天子てんしを蔑あがにす。其罪つみを糺たださんごし玉ふ。是を御謀叛ごぼうはんなご、稱しやうし公家官人くわがくわんにんを召捕まうと。雜人ざうにんの如ごとにし。天位てんゐを傾かたけんごの企け。神罰しんばつ免ゆるるゝごころなし。譬たとへ武威ぶゐをもて。一旦いつたんの勝利しやうりを獲とるごも。なんぞ子孫しよんの後榮こうゑいあらん

や。北條家の滅亡めつわうを招まねくに似にたり。是非せいひを論ろんぜず。天位てんゐを傾かたご思おもはゞ先藤房せんとうぼうをきるべしご。席せきを進すすみ玉ふ。其理そのり明白めいはくなるによつて。流石りうせきの高時たかときも閉口へいかうす。一門いもん三十八人。武士ぶし三百六十人。一人ひとりごして詞ことばを發はする者なく。廣々くわくくわたる席中せきちゆう。何れも頭かしらを垂たれ。眼めを閉とめ。さながら寢ねいりもごこく也秋田城あきたじやう之介のすけ時顯ときけん進すすみ出でて。御理解ごりかいのおもむき畏かしこり高時たかときをはじめ。一統いっとう口くちを閉とめて罷まかり在り。此上このかみは仰下おんげさるゝにおよばず今日けふは御旅館ごりやうかんへ御引下ごひきくだされ度。何れ舊日かうじつの罪つみをわび奉まうさんご願ねがひければ。藤房卿とうぼうけい曰いく。然しかば三人さんにんの禁獄きんごくを。速はやく免ゆるすべしご。座ざを立てしづ／＼として。旅館りやうかんにかへり玉ふ。高時たかときやう／＼頭かしらをあげて曰いく。藤房とうぼう辨舌べんぜつを振ふるひ。當前ごぜんの理りを解ときいへごも。本意ほんいにあらず。助け置たすけおは後日ごにちの妨さまたげ。彼等かれら帝ていへ進すすめ奉まうり。鎌倉かまくらを亡ほろさんご企ける條じょう。惡にくき振舞ふるま

ひなり。此上は是非を論ずるにおよばず。兵をつかわし。藤房の首をきつて。北條家の災を除ん。速く其用意せよと。殿しく下知を傳へければ。禮おも儀をもわきまへぬ。猪武士。たゞ高時に詔ふて。下知にしたがる。專その手配りをなしにける。秋田時顯大ひに驚き高時を諫て曰く。武威をもて。公家を罰ことはやすけれども。朝敵の名を得るときは。背きて隨ふ者なし。されば北條家の滅亡を招くが如し速く三卿を免し。都におくり玉ふべし。永く鎌倉に止め置ば違勅の罪免れがたく。北條の家名の穢れ。猶豫する事にあらずと。強て諫めける也へ。高時も是非におよばず。其意にまかせ。三卿を免し。藤房卿と。ともに都へおくりかへしける。藤房卿は三卿ごごもに。都にかへり。直に參内して。鎌倉の不禮言語に絶たるよし。微

細に奏聞におよび玉ふ。帝いよく逆鱗つよく。高時を亡さんご。密に催し玉ひける。北條高時は。秋田時顯の強諫によつて。藤房卿をはじめ。三卿を免しかへすといへごも。猶怒りを止めず。大軍を發し。都に推登り。帝を遠島に遷し奉んご。關東八州の。勢兵を催促におよびける。秋田城之介時顯。今は諫るにたよりなく。北條家の滅亡遠からざるを察し。鎌倉を退去して勢州朝熊岳の麓。朝熊村榮松庵といへる。禪庵に蟄居し。天下の治亂を窺ひ。終に此庵にて没せらる。則山内に塚あり。猶遺物として。太刀は之作寺に納め。差添同作は同村之住。橋本助左衛門に譲らる。また秘法の妙薬あり是は野間因幡といへる者に傳らる是を諸人助の爲にこて。賣薬とし。朝熊岳の万金丹と號。却説鎌倉には秋田時顯退去の後は。佞臣

等時を得て。高時に諂ひ。眼前の賤理を論じ。後難をしらず。高時  
 愚にして。天罰を願す。専軍勢をそらへ。不日して京都へ。推寄る  
 手配りおぞなしにける。此事都へ聞へければ。帝やすからざる事  
 おぼしめし。急ぎ都を出御あり。南都の方へ行幸し玉ふさいへども  
 此地も御心になはす此時山城國笠置山は。要害堅固の岩窟なるよ  
 し。奏聞におよぶ者あり。依之直に皇居を遷し奉る。此岩窟にお  
 て。近國の武士を御催促あり。追々參着の者ありさいへども。皆微  
 祿の者にして。従者五十人にすぎず。是の如小勢にては。鎌倉の大  
 軍を防事かたし。叡慮を惱し玉ふ。爾時奏し奉りけるは河内國に  
 楠正成さいふ者あり。文武に達し正直にして。常に北條高時の。武  
 威を惡河州赤坂さいふ所に。潜居るよしなり。萬卒は得易く一將は

難得さいへる。古語に習ひ此者を召よせられ。彩幣をさらせ玉は  
 招かずして。軍勢は集るべしとなり。依之萬里小路藤房卿。勅命を  
 蒙り。笠置の老僧を引導者として。河州赤坂に行て。正成に對面し  
 勅命のおもむきを演ければ。楠正成謹でうけたまわり。藤房卿に隨  
 ひ。笠置の皇居に至る。則奏聞に及。叡感不斜玉座近く召寄たまひ  
 逆賊北條高時を誅戮すべき旨。勅命を下さる。正成謹で。今度鎌倉  
 の大軍は必ず。武相の勢なるべし。日本六十餘州の勢をして。推寄  
 ることも。武藏相摸の兩國勢には。あたりがたしさいへり。然れども  
 北條高時奢に長じたれば。あざむくにやすし。しかしながら軍法に  
 は。進退のかけひきあるものなれば。一旦の勝負は。御覽あるべか  
 らず。正成存命仕らば。聖運ひらかせ玉ふべしと奏しける。帝深く

よろこび玉ひ。急ぎ其手配りあるべしとの勅命也。楠正成長て。河州赤坂にかへり籠城す。爾時鎌倉の軍勢。大佛陸奥守を大將として大名六十三人。總勢二十六萬。七千六百餘人と聞へたり。京都六波羅には。常盤駿河守。三萬餘人をしたかへ。鎌倉の大軍に力をあわせ。笠置の皇居へ推よする。鎌倉がたは。河州赤坂へおしよせたり。此時楠家の籠城。漸五百餘人なり。常盤駿河守は三萬餘騎をはげまし。帝を隱岐國へ遷し奉る。楠家は奇計をめぐらし。赤坂城を逃れいで。鎌倉勢を。しりぞかすといへども。再び大軍攻登るを聞へ。ける也へ。同國千破矢に籠城す。其勢纔八百餘人なり。鎌倉勢は八十萬餘とさこへける。しかれども種々の智略をめぐらし。防戦に奇計おふく。敵を腦す不思議の良將なり。依之よせての大軍攻あくみ

て。遠卷にぞしたりける。楠家はすこしも。屈する色なく。間者をつかる自由に諸方へ通達し。籠居すこしも。怠りなかりける。寄手の諸將は心たるみ。うちよりて。詩歌連誹基双六或は酒妾に樂もの多かりける。然るに大塔官は。高野山の奥に在て。赤松律師則祐に命じ。赤松圓心に奇計をさづけ玉ふ。則祐直に播州へ急ぎ行て。父圓心に對面し。大塔官の令命を傳ふ。圓心即時に一門の兵を集めて軍配を定めて。京都六波羅を攻る事急なり。常盤駿河守驚て。鎌倉へ訴。高時急ぎ下知を傳追手の勢を差向る。然るに京都に近くなりて。其勢の中より。足利高氏官軍に屬し。赤松圓心に力をあわせ。六波羅を攻む。北條左近將監時益。同越後守仲時等終に戦死す。餘は散々なつて逃遁もあり。また降人となるも多かりけり。依之千破

矢城の圍も忽に解たりければ。是より楠赤松力を合せ。帝を迎へ奉ん事をはかりける。爾時名和伯耆守長年は。帝を迎へ奉り。伯耆國船上山に。皇居をうつし。守護し奉ける。依之隱岐判官清高。佐々木禪正左衛門昌繩馳むかゝて戦ひへごも。長年の軍配にひしがれ昌繩は戦死す。清高は逃れ去りぬ。依之逆ふ者なく。長年帝を守護しやすく。船上山を出。都へ還幸を進め奉る。此よし國々より都へ注進す。これによつて楠足利赤松いづれも。播州までいで。迎へ奉り。元弘三年六月五日。都へ還幸あり。この時新田義貞。北條高時を亡し。將軍守邦親王は。鶴ヶ岡におゐて。剃髮染衣の身となり。入道し玉ふよし注進す。依之帝御心やすくおぼしめし玉ひける。此時大塔宮護良親王は。還俗し玉ふによつて。征夷大將軍に任

じ玉ひ。天下の政事を主ざり玉ふによつて。泰平の御世とはなりける。然るに足利高氏は。征夷大將軍を望みへごも。大塔宮其任につき玉ふよつて。我望の空しくなり。何ぞぞして。官を退んご。種々の悪計を企けるに。今帝深く寵愛し玉ふ。准后は大塔宮。其中不和なるよし。是を聞て。高氏幸ひの事におもひ准后に諂ひて。大塔宮に。御謀叛の企て有之よし。讒言におよびける。帝は准后に。御愛情ふかき也へ。讒にまよひて。罪なき。大塔宮を。高氏の弟。左兵衛尉直義へ。預け玉ふよし聞へければ。萬里小路中納言藤房卿楠正成大に驚急ぎ諫奏し奉るごいへごも。准后御側に在て妨る也へ忠諫を用ひたまはず。終に左兵衛尉直義あづかりて。鎌倉へおりければ藤房卿は再び。世の乱ん事を悲みて。楠正成に遺言して。都を

逃れいで。山中に入て再びいでたまはず。楠は世の乱ん事を知さいへごも。武士の遁世は。戰場に死を清くせんものをこ。此時より戦死の心を決せしこなむ。却説左兵衛尉直義は。大塔宮を土牢に入置けるに。北條家の殘黨旗をあぐるよし。聞へければ。高氏勅命を蒙り鎌倉へ馳むかる。直義と力を合せ北條の一類を亡し。猶謀て。淵邊伊賀といへる者に申含め。大塔宮を殺害し。北條の一類恐び入て害せしこ。奏聞におよび。猶准后に諂ひける。然れごも。天罰免れがたく。終に露顯におよび。追討の軍勢をさしむけらる。高氏朝敵となり。八州の軍勢を催促して。都へ逆よせをぞなしにける。其勢八十萬餘と聞へける也へ。都には專防戦の手配あり。猶准后の口入によつて。新田義貞を大將とし。楠正成を副將とし玉ふ。しか

れごも。楠偏執の心さらになく。義貞に力を合せ。奇計をめぐらし八十萬餘の大軍を數度の戦になやまし。終に足利兄弟を。西國へ追下し直に追討すべき所。暫人馬の息を休ん爲都に還り。合戦の始末を。奏聞におよびける。義貞は。楠の武畧に。およばざるによつて種々の賄賂を運び諂ふ也へ。准后は唯敬を。うくる事のみをよろこび。何のわきまへもなく。今度楠の戦功を。新田にかへて。奏しける。依之新田義貞を。左中將に任じ。楠には何のさたにもおよばれず。猶其うへ。准后のはからひこして勺當の内侍を義貞に賜ふ。義貞は内侍の。艶なるにまよひ。出陣の心さらになし。楠正成出陣をいそぎ。新田への催促。再三におよばるゝこいへごも。病有と偽りて。對面をさへ。なさざりければ。是は容易からず。追討延引にお



よはゞ。智謀ふかき。足利兄弟不日大軍を發し。攻登るべし。さればゆゝしき大事なりと。急ぎ參内して。今度足利兄弟を。西國へ追下すといへども。捨置ば近きに。大軍を發し。攻來るべし。速く追討の勢を差むけずんば。大亂の墓なり。新田義貞病あつて。出陣なりがたし正成に。大將の命を賜はゞ。馳むかふて。一戦におよび足利兄弟の首を見んこと。正成の謀略にありと。出陣を乞奉る然るに防門清忠。參議光經は。義貞より。おふく賄賂をうけし者ゆへ。今義貞虚病なる事をさつし。正成の願を妨げ。奏聞におよばず。依之空しく。陣所にかへり。佞臣殿上に在て。さまたげをなすゆへ。力およばず。足利兄弟攻きたらば。速に討死して。帝の御夢をさまし奉んかならず新田義貞合戦にうちまけ。足利の世ならん。其時帝

を遷し奉るべき地を見立置んこと。吉野山に登り。皇居の地を定めん事を。役行者に祈玉ふ。爾時忽行者出現し玉ひ。汝が誠忠を憐み今皇居の地をさづくるなり。是また深き因縁あり。汝が父楠正立年四十歳におよびて子なき事を歡き。河州志貴山に登り。毘沙門天王を祈りて授りしは汝なり。志貴山に安置する。毘沙門天王は我前生に。守屋退治の時勝軍木をもて。自作り兜の中におさめ。勝利を得し尊像にて。靈驗あらたなり。此因縁によつて。皇居の地を教ん。早く來さ先に立。峨々たる嶮山に登り玉ふ。行者前生の事本文にくはしく述。楠正成行者の御後をしたがひ登りける。行者は賀名生といへる所にして。告曰く此所を。要害の地と定め置ば。百萬の大軍攻寄るごも。登る事かたし。必ず是に違ん事なかれとおしへ。直ちに虚空を踏んで。山上

ケ嶽のかたへ。さびさり玉ふ。楠正成奇異のおもひをなし。行者の御あごをはあし。其地を見るに。嶮岨の山頂に平地あり。また靈水まんくごして。不思議の城地なり。此所に繩張して。皇居の地をさだめ。それより都へ馳登りける。爾時遠察にすこしも違はず。足利兄弟は。西國勢七十萬餘の大軍にて攻登るよし。注進櫛の齒を挽が如し依之殿上俄に周章し。新田義貞は攝州兵庫へ出張す。楠正成攝州櫻井の宿にて。正行に吉野皇居の地を。行者の告玉ふごこく。微細に教へ。恩智左近太郎滿一に申合せ。皇居を遷し奉るべし。二十歳になるまで。彩幣を滿一に預け。かならず軍事を母に談ずべからすこ。遺言して纔七百人をしたがへ。攝州湊川へ出陣ある。正行は七千六百餘人をひきて。河州赤坂へ歸りひそかに皇居のやうる專

なり。正成七百人をもて。七十萬の大軍にあたり。三日の戦に毎度勝和を得るこいへごも。もごより覺悟の事なれば。心靜にさるで酒宴を催し。主從六十三人自害して。末世に武名を輝し玉ふ。和漢にまれなる良將なり。足利高氏は大軍をはげまし。新田義貞を追散し都に亂入し。東寺を本陣として。光嚴天皇を帝と仰ぎ。後醍醐天皇を。花山の古宮に推籠。越智伊賀守を番士とす。此花山の古宮といへるは。荒宮にして。さなから配所の如し中務局唯一人御側にさむらあけるこそ哀れなり。然るに正行父の遺言を堅く守り。吉野に皇居を設け。恩智滿一を使として。越智伊賀守を解て。官軍に屬せしめ。楠家の勇士十四人。建武三年十一月十一日の。雪の夜。古宮にしのび。越智に力を合せ。竊に吉野へ遷し奉り吉水院。實成院の。

兩寺を皇居ごして。守護し奉る。然るに。足利高氏大軍を差むけ。河州四條繩手に戦。楠正行此戰場に。討死す。依之足利勢は。吉野に推寄る。帝は賀名生に籠り玉ふゆへ。よせての大軍近付見るに。嶮岨なる事。眼を驚ばかりにて。攻登るべきたよりなし。依之人馬の息を休め。再びよするに。以前に倍して。峨々ごして高く聳へ。彌々登るべき道なし。是は道を違へしならんご。馳廻るに。猶々人馬の道路絶たり。高野越後守師泰。高野武藏守師道。烈しく下知を傳へ。數萬の軍兵一度に。攻登んごす。此時俄に白雲起て山の腰に遶る。敵はさながら。雲中に在が如し。總勢不殘天を仰ひてひかへたり。依之力たよばず退きてより。再び歎する者なく。やすくご皇居を定め玉ふ。是偏に役行者の。御威徳なればごて。後醍醐天皇

勅を下し。多くの櫻を植させ玉ひ。藏王權現への手向ごし玉ふ。年々に繁茂して。千本の櫻ごはなれり。此ゆへに權現の。御愛樹ごはもふすなり

大峰は本佛生國の山なる事

大峯は本是佛生國の山なり。昔し空中より飛來りて。日本に落留まるといへり。行者は此山にして修行し玉ふご七生なり。鬼神を駈使して天竺無熱池の水を取しめて。水瓶に湛へ山上に埋ましむ。其より三重の瀧を流出せり。護法神をして毎日寅の時に此淨水を兩山に灑しめて。修行者に益を得せしむ。初め二三生は骸骨を留む。第四生より第七生に至るまでは骸骨を留めず。初生は長七寸五寸。第二生は八尺五寸第三生は九尺五寸なる。三重の石窟は初生より第三

生に至るまでの建立なり。神仙が獄に三重の石窟あり。初生の時には下の岨に阿彌陀の曼荼羅を安置す。第三生には中の岨に胎藏界の曼荼羅を安置し。上の窟には金剛界の曼荼羅を安置す。岨ごとに大壇檄五色五股鈴闕伽器等までを。皆石を以て造り置玉へり。第三重の岨の良の角の石に行者の肖像を彫付たり。又劍の獄に劍あり。八角にして長サ九尺なり。此劍は大唐の後の御願海岸寺の寶物なりしを。行者傳へて此獄に安置してより。劍ヶ嶽と名くさいへり。第七生には葛上郡茅原の郷に生を受玉へり。大峯の縁起の文は行者の母賀茂氏權現の御示現に依て感得し玉ふ處なり。行者義覺に授く義覺より數代傳ふさいへごも。法器の人なきに依て。金峯山藏王堂の祕所に埋むさいへり。傳 眞言 又金峯山は其の地皆な黄金なること。釋書

の良辨僧正傳に見たり。

河内觀心寺役行者靈驗之事

河州錦部郡觀心寺に役行者の形像あり。元祿八年六月廿三日の夜。北之坊春深と云ふ僧を。行者誘ひ引て金剛山に登り。法起菩薩と稍久しく語り玉ひ。其より多武の峯に至り。長谷寺を拜し。三輪に詣し。奈良の春日山に至る明神現形して對話し玉ふこと數日。因て語り玉はく。大坂の人行者の像を作る。往て見玉へごありければ。行者の曰く今時の佛師は我が如くすんがりご。瘦たるやうに造ることあたはず。然れごも一見すべしごて空を飛で大坂に至り玉ひ。佛師の家にて見ての玉はく。此佛師は甚拙手なり。肥すぎて見苦しご佛師に問へば此形像は吉野の小篠に進するなりと云ふ。其より笠置

山上の醍醐。岩間寺。石山三井寺。叡山に登るに。皆虚空を歩みて行くこと陸地の如し。其より三上山に登り。伊勢の國に至る。其間に岩窟。靈峯。聖寺。殊妙の伽藍を拜すること數を知らず。夢の如く記へたり。伊勢の二見浦。阿漕。津島の海邊より。朝熊山に登り内宮外宮に詣す。此間の奇峯靈寺大伽藍甚多く。具に記へがたし。其より暇給はつて觀心寺に歸るに。四十九日を経たるを二三日と思へり。春深行者に問。眷屬の前鬼後鬼を召連玉はで。愚僧を召連れ玉ふは何の故ぞや。行者の曰く。前鬼後鬼も予か留守の間に各々役儀あり。汝ちを召具するは汝ちが病を痊さんがためなり。此年は北山にて路も嶮難にあらざれば汝ちが幸ひなり。來年は紀の川より南山を巡るなれば。甚難處多し。春深行者より梵字十七字を習ひ

傳へ。奇妙の秘符を出して。諸病を痊す事は冥應集の第一に具さに記せり故に今は畧す。又元祿の初め六月上旬に。一人の異人金剛山に登り齡六十餘を見て白髮半なり。唐金の履だに鐵の鼻系をすげ鐵の柱枝を策。鐵骨の笠を戴き。行者坊に來つて食を乞ふ。故に呼入て食せしむるに。笛を取出し中より鐵の箸を出して用也。諸僧不思議に思ひ彼履なごを仔細見るに齒滅て踏所は足の指の痕あり。中々老人の用也へき物と見す。住持問て曰く。公は常に此の履を著や。老翁の曰く常に此を著て大峯葛城富士山までも登ると云ふ。諸人怪しく思ひ彼れが歸るを見るに。安々と歩みて。千劔破を指て下れり。爾後再び來らす。今想到若しや行者の巡り來り玉へるにや。さも思はざることこの悔しさよ。後には臍を噬けり。寔に六十有餘

の人。熟銅の履だを著き。鐵の杖を策て山に登るべきやうなし。近代の不思議なり。行者唐土に住し玉へごも三年に一度は日本に渡り三山を巡るこ。道昭に語り玉へるは實なるかな。

役行者は悉地成就の持明仙人なる事

行者は下品の悉地成就の持明仙人なり。法道仙人は天竺の五百の持明仙人の一人にして。日本に飛來り玉ふ。此も役行者の類なり。天竺の清辯論師も法道仙人の類なり。日本の仙人も亦數多し。垂仁天皇の皇女倭姬の命は伊勢の齋宮なり。壽五百餘歳にして。雄略天皇の十二年四月に。伊勢の山中に入り手を以て磐を開き。乃ち窟に入て見へず。常世の國に至るこいへり。武内宿禰は三百十七歳。丹波の浦島が子は三百四十餘歳。此三人は佛法に歸するにあらず。神代

の神人とも云ふべし。泰澄和尚。勝尾寺の善仲。善算。仁鏡法師。久米仙人。大伴仙人。安曇仙人。七百歳。陽勝仙。生駒仙。藤太主源太主。松室童子。願覺法師。喜撰法師。都良香。都藍尼。舍利尼和州宇多郡漆部造磨が妻子七人。業平。小野篁。若狭白比丘尼。越前大男等も仙人なり。聖德太子。弘法大師。伏見翁。行叙居士。教待和尚。行基菩薩。婆羅門僧正等は。菩薩の化身なれば評するこを得ず。神社考に載す。常陸房海存。長生して今にあり。猪俣の金平六吉野山の奥に住んで今に存命せりこ。義經記には源九郎義經。辨慶等仙藥を服して。蝦夷が島に渡り。久しく死せずこいへり。是も仙人の類か。

### 役行者御傳記卷之下終

明治四十一年四月廿一日 印刷  
同 年四月廿五日 發行

不許  
複製

發行兼編輯者

藤井佐兵衛

京都市寺町通五條上ル西橋詰町二十五番戸

印刷所

小林活版所

京都市醒ヶ井魚棚上ル

發行所

京都市寺町通五條上ル

藤井文政堂

京都市寺町通五條上ル 藤井文政堂發賣略書目

眞言諸經要集

此經の内には... 眞言諸經要集... 眞言宗の根本經... 眞言宗の諸經... 眞言宗の要集... 眞言宗の略書目... 眞言宗の發賣... 眞言宗の發行... 眞言宗の印刷... 眞言宗の編輯... 眞言宗の複製... 眞言宗の不許... 眞言宗の複製... 眞言宗の不許... 眞言宗の複製... 眞言宗の不許...

明治四十一年四月廿一日 印刷  
同 年四月廿五日 發行

不許複製

發行兼編輯者

藤井佐兵衛

印刷所

小林活版所

京都市醒ヶ井魚棚上ル

京都市寺町通五條上ル西橋詰町二十五番戸

發行所

京都市寺町通五條上ル

藤井文政堂

京都市寺町通五條上ル

山城屋

藤井文政堂發賣略書目

上田實道師編輯

大増補 眞言諸經要集

印刷上板 正價 四拾錢  
平かな付 郵税 四錢  
帙入一卷

(此經の内には) ●般若理趣經 ●金剛界禮懺 ●胎藏界禮懺 ●觀音經 ●不動尊秘  
密陀羅尼經 ●心經秘鍵 ●般若心經 ●禮文 ●五大願 ●前讀 ●後讀 ●九條  
錫杖 ●三陀羅尼 ●兩界五佛眞言 ●十三佛眞言 其他諸眞言入りてあり

是れ迄販賣致せし眞言諸經要集かな付はひごく板木磨滅せしにより今回左の通從來の御經よりも大に増補し字句を校正し頗る美麗にして鮮明なる印刷にて出版したれば如何なる老人方にても明丁に讀誦し得らるゝの良經なり



醍醐源大師御肖像 齊藤隆現僧正著述

### 理源大師實傳記

平かな付 正價拾八錢

聖實理源大師は讚岐に生れ真雅僧正に隨て得度せられ秘密の奧義を究め名山靈地をふみ廻り殊に金峯山役行者の後を開き大蛇魔鬼を退け諸寺を建立して密教秘密の傳法の祖師にして大に佛法を弘通し給ひしかば仁和三年勅して大阿闍梨號を賜れり并に大師號をも玉りたることを一切の御傳記を委しく記載したれば是悲一讀せらるべし

### 十三佛由來

平かな付 正價貳拾五錢

本書は初めに御本尊の御名義と御體相をあらわし次に御經文と陀羅尼を解き終に御誓願と功德を擧げ其の御利益の有難きを知らしむるに抑も十三佛諸尊は僧家も在家も朝夕の勤行には勿論其由來を知るに又在家者方は一佛一尊毎々御信仰の御方幾なれば僧侶の功徳にも御本尊は如何なる御誓願にありしや自分日夜讀誦の御經陀羅尼は如何なる意味の功徳に非ざれば宗教は其の由來を知る人は真にまねたり依ては其由來と功德を知らるる書の著したれば是非一本購讀あれ

文珠菩薩所説

### 二十八宿日割鏡

正價五錢 郵稅貳錢

日蓮大士が宿曜經二十八宿に依り一年三百六十五日を毎月毎日二十八宿に割出し一覽表となせし諸事の吉凶を見事鏡に向ふ如く如何なることにも直に知り得る良書なり

### 眞言法話百題

菊版形美製紙數三百五十頁 正價拾八錢 郵稅八錢

○人何の常惡：泉秀明師○若無量：泉秀明師○顯密二教：長谷實師○眞言不思  
議：長谷實師○迷悟在：小田耕岳師○遍照：龜山圓海師○慈悲：圓海師○愛  
丹生：榮師○能入：松全道○芳齋：速松全道○高樹：隆師○四恩報  
正師：松全道○信爲：松全道○善惡：速松全道○我昔：昌昌師○安永  
謝師：松全道○心一：真井深覺師○凡道：育昌師○度松全道○我昔：昌昌師○安永  
松全道○如實：昌昌師○心一：真井深覺師○凡道：育昌師○度松全道○我昔：昌昌師○安永  
英師：如實○昌昌師○心一：真井深覺師○凡道：育昌師○度松全道○我昔：昌昌師○安永  
皇靈祭：兒島昌昌師○心一：真井深覺師○凡道：育昌師○度松全道○我昔：昌昌師○安永  
五日：肥田盛道師○心一：真井深覺師○凡道：育昌師○度松全道○我昔：昌昌師○安永  
利益：高野山殊勝師○心一：真井深覺師○凡道：育昌師○度松全道○我昔：昌昌師○安永  
師○高野山殊勝師○心一：真井深覺師○凡道：育昌師○度松全道○我昔：昌昌師○安永

上田照暹大和尚題辭 雲照、照暹、智滿、三大和尚御肖像  
真言宗各家派布教師述并ニ御肖像 布教練習所々長和田大圓僧正編纂

# 真言法話百題

編中

菊版形製五號活字  
紙數約三頁  
特別割引金四拾五錢  
郵税六錢

布教傳道は宗門の生命とせらるゝ處にして何者も是に及ばずされば宗教の如何に拘らず苟も人心化道の任務に在るものは如何にせば多大の効果を收むべきかに就きて日夜焦心苦慮せられざるはなし殊に吾真言宗の如き最尊無比の教義をして俚耳に入り易く説くこと難き豈に當に他の顯教諸宗の比のみならず先や然るに吾が宗是に關する良書に由り同志ある諸師の深く遺憾とせられし處なりしが先に真言宗布教練習所諸師の發起に由り同志長和田大圓僧正此決點を補はんとして本書を編まれ中篇今茲に成る載す處の法話は皆學德經驗共に全き本宗布教教師諸大師の満足を得ると共に檀信徒諸師の座右の寶典たることを得む 請ふ愛讀を賜れんこと

眞言秘密

# 九字護身法

印圖入一卷

正價 六錢  
郵税 貳錢

抑も九字護身法は眞言秘密修法の一にして加持祈禱の際水行を修する時又は夜道或は魔道に犯かされし時など修すれば諸の惡魔。狐狸。妖怪。を拂ひ一切の厄難怨敵を降伏し身心堅固たらしむ誠に神術秘法なり

# 吉凶禍福判斷



- 觀世音 ○辨財天女
- 地藏菩薩 ○妙見菩薩
- 毘沙門尊天 ○摩利支天尊 ○弘法大師
- 歡喜天稻荷社 ○天神社等諸神諸尊御前

右御闡の御札は寺院の御前へ御闡の箱を置き信者參詣人は御闡の何番號を引出して御札一枚を授り信者これを御見吉凶を判斷するものなり印刷鮮明書入平かな付見本御申越の方は何時にも御申越次第進呈す

# 百番の御闡

第一番より百番迄一組ニ付百枚ツ、

竹百本 正價金六拾錢  
小包料八錢  
此御闡箱は御好に願し如何様のにも調製仕候

十組	三千枚	金壹圓	小包料拾貳錢	一枚壹厘割
三十組	九千枚	金貳圓七拾錢	小包料貳拾錢	一枚九毛割
五十組	一萬五千枚	金四圓	小包料貳拾八錢	一枚八毛割
百組	二萬枚	金七圓	小包料五拾貳錢	一枚七毛割

右の通りの直段にて何番何枚にても拔賣仕候 但し一枚に付壹厘の割



別所榮嚴和上原著服部鑲海僧正講著

●密宗安心教示章講義錄 一冊 正價貳拾八錢 郵稅四錢

本宗の宗心教示章を服部鑲海師是れを講義せられたる書なれば布教上一日も缺べかさは僧家必ず拜讀すべき品本宗の安心を了解するには最も必用の書なり

服部鑲海僧正和解

●在家勤行法則和解 一冊 正價貳拾五錢 郵稅四錢

在家勤行法則と眞言安心和讃。光明眞言和讃を俗家に知れ安く平かなを付し書を入たり

●弘法大師行狀記圖會 正價壹圓小包料拾貳錢

大師か御誕生より高野山へ御入定し玉ひし御一代中種々の奇話妙瑞委しく面白し有難く深切に解りやすく大字にて平かなを付けくはしく明細に繪を入れたれば老人又は婦人方

にても讀やすし

法界寺堪空上人謹述

●弘法大師御一代讚義 木版平かな繪入半紙形三冊正價參拾五錢郵稅六錢

右の品は大師御降誕ありしより御出家の後種々の御高德ありし御一代中の事々を委しく記して繪圖を入れたる良書なり

●弘法大師御一代記圖繪 小本二冊 正價貳拾錢 郵稅四錢

右は大師御一代中御靈驗御高德話委しく記したり銅版平かな付書圖入小本なり

増上寺行誦上人校閱

●釋尊一代

三世の光

平かな付書入

正價壹圓 郵稅拾貳錢

從來我國に行はるゝも其類少しとせざれ共皆大抵小説的のもの○慈雲尊者の門下皎月比丘尼正確の材料を計ね多年研究の結果終に此篇となる佛教を學ぶもの一讀して有益なる事信じて疑はざるところ

●孝

養集

三冊 正價四拾五錢 郵稅八錢

興教大師覺鑲上人の御在世中御母君へ御送に相成たる有名の品なり文章法話の具備したるは可見なり演說法話の好材料たる書にして興教大師の自著なり

●道徳談話集

平かな付書入二冊 正價貳拾五錢 郵稅六錢

道徳主義を奨励せんが爲に興味あり教訓となるべき談話のみ輯録ふ尤も懇篤に示したれば婦女子に適當なり希くば熱心なる諸氏速に一本を購ふて其言を試み給はんことを

●和論

語

二冊 正價參拾錢 郵稅八錢

聖皇貴公の金言より高僧勇武貴女の芳談に至る迄數百條の格言皆是れ治國經世の要修身齊家の軌道たらざるはなし布教傳道者之れに皮肉をつけ以て現今の社會に應用せは蓋し其利益尠少にあらざるを信す

長者原心猛大僧正殿贊 智山金剛宥性大僧正殿贊

●弘法大師行狀曼荼羅

天地一尺八寸 幅一尺二寸

一枚正價金四錢十枚特別參拾五錢、郵程五部迄貳錢  
書箋紙摺一枚に付金五錢、十枚に付特別四拾錢郵稅四錢

此圖は大師御一代中の行狀を極細密畫にて鮮明に悉しく記載し圖の數八十有餘之れあり實に行狀曼荼羅御圖中悉しきなり

島地黙雷師題字 小山憲榮師序文 町元吞空師編述 郵稅八錢

●龍頭十二宗綱要 二冊 價五拾錢 郵稅八錢  
○俱舍宗 佐伯旭雅師 禪宗 辻顯高師 成實宗 上田照遍師  
○法相宗 高志大連師 律宗 上田照遍師 日蓮宗 小林是純師  
○華嚴宗 高野實辨師 華嚴宗 小栗香頂師 三輪宗 上野相憲師  
○天台宗 野元觀師 淨土宗 町元吞空師 眞言宗 小栗香頂師  
○修驗宗 町元吞空師 淨土宗 町元吞空師 眞言宗 小栗香頂師  
○宗要解 町元吞空師 淨土宗 町元吞空師 眞言宗 小栗香頂師  
○各宗綱要解 町元吞空師 淨土宗 町元吞空師 眞言宗 小栗香頂師  
○長智山化主瑜伽教如大僧正題字 紫堂學人齋藤隆現僧正著述

●光明眞言功德述議 一冊 正價拾貳錢 郵稅貳錢  
光明眞言は朝夕に誦讀し奉るも其義理深奥にして容易に其底を詞ふこと難し齋藤僧正に俗人の爲め解釋し分り易く平易と專として遂一懇切に委しく誰人にてても了解する様述べられたれば光明眞言の功德廣大無邊にして難有ことを記し僧侶諸氏は之れを以て説教法話の材料とし信徒諸氏は是に依り光明眞言の功德廣大たる事を知り玉へ

●新刻四國八十八箇所山開 并に光明壹部 價四錢 十部以上特別割引  
眞言訓讀 郵稅三部迄貳錢 參錢五厘宛郵稅六錢  
本書は文章は五七の句にして其優美高尚從來發行しあるもの、比に非ず上段に遍路里程と御詠歌を掲げ光明眞言の訓讀を付したれば四國巡拜者は勿論法事の引物四國土産等に至極適當

●新撰呪咀調法記 一冊 正價拾八錢 郵稅四錢  
呪咀は諸經の要文神呪を以て衆生の病腦苦患を救ひ給ふ秘訣上古上り神に祈るの道在て不二靈妙なり安部の清明陰陽の道に精しく専ら神符を以て衆人殃を救ふ役行者孔崔明王の呪を持し秘符を以て災を消す弘法大師九字護身法を示し神符秘傳にて諸の呪を以て崇を解き給ふ、本書これを符合して世永上久の寶とす不時の形病急病もろくの災ひ是の書にあらずして豈に能く免るゝ事を得んや依て四方に弘道せらるゝ世に有益の寶冊なり

●善通寺佐伯法遵僧正題字 高藤秀本僧正校閱 岩城元隨僧正編纂  
八十八四國靈場誘導記 二冊 正價貳拾八錢 郵稅四錢  
此書始めに法身如來より本宗安心並に光明眞言の功德を解き之れより弘法大師の御實傳を挙げ四國開發ことに八十八ヶ所に付一々御縁起御詠歌並に道中の里程終りに靈驗を記したるなり

●權田雷斧僧正編纂  
●説教醍醐の一滴 第壹篇 再版 正價貳拾錢 郵稅四錢  
●説教醍醐の一滴 第貳篇 正價貳拾錢 郵稅四錢  
●説教醍醐の一滴 第參篇 正價貳拾錢 郵稅四錢  
●良材醍醐の一滴 第參篇 正價貳拾錢 郵稅四錢

●本書は説教大家權田雷斧僧正服部饒海僧正泉知等僧正講師を初めとし大家數十餘名の説教の集録したる書なり

密嚴諸秘釋	諸の秘釋諸法を集む	十冊	正價壹圓六拾錢郵稅貳拾錢
十善戒法論	十善戒の講義活版	一冊	正價貳拾五錢郵稅六錢
愚迷發心集	解脫上人の法話活版	一冊	正價貳拾錢郵稅四錢
科註十住心義林	十住心論の要義を抜萃す	三冊	正價七拾錢郵稅八錢
靈魂引導諷誦記	諷誦文を集む	二冊	正價參拾貳錢郵稅四錢
通俗礦石集	諸佛の靈驗を記す活版	二冊	正價四拾錢郵稅六錢
結網集	根來、知山高僧の傳記	三冊	正價五拾錢郵稅八錢
付法傳	八祖の傳記大師著	一冊	正價拾六錢郵稅四錢
文鏡秘府論	大師著詩文	三冊	正價六拾錢郵稅八錢
般若心經秘鍵	科註す	二冊	正價參拾五錢郵稅六錢
悉曇字記捷覽	悉曇字記を解釋す	二冊	正價參拾五錢郵稅四錢
梵漢阿彌陀經	梵字と漢字にて記す	一冊	正價貳拾錢郵稅四錢
梵語千字文	梵字と漢字の對譯	一冊	正價參拾錢郵稅四錢
眞言種子集	梵書の大字	二冊	正價四拾五錢郵稅六錢
般若心經異譯	異釋心經數種集む	一冊	正價拾貳錢郵稅貳錢
四十九院	梵字にて記す	一冊	正價貳拾錢郵稅貳錢

四十九院抄	註釋	一冊	正價拾八錢郵稅貳錢
般若心經	大師流の書を習ふ好手本	一冊	正價拾貳錢郵稅貳錢
舍利供養式抄	御舍利供養の事記す	二冊	正價參拾貳錢郵稅六錢
珠數功德經抄	珠數功德の事を記す	一冊	正價拾八錢郵稅貳錢
引導要集便蒙	引導諷誦文委し	六冊	正價壹圓貳拾錢郵稅拾貳錢
光明眞言金壺集	眞言の功德并に安心	一冊	正價貳拾錢郵稅四錢
好夢拾因	彌勒大士の事	二冊	正價參拾貳錢郵稅四錢
地獄實有說	地獄の話し	一冊	正價拾錢郵稅貳錢
いろは天理抄	いろはの由來	二冊	正價參拾五錢郵稅六錢
西行法師一代記	書入平かな付	三冊	正價參拾五錢郵稅六錢
初學暗誦要文	頌文を集めたり	一冊	正價拾六錢郵稅貳錢
元三大師御闡	みくじ本百番	二冊	正價參拾錢郵稅四錢
三十二番御闡	みくじ本	一冊	正價拾貳錢郵稅貳錢
小夜中山靈鐘記	說教鐘の由來	一冊	正價八錢郵稅貳錢
宿曜經	佛易書	二冊	正價參拾五錢郵稅六錢
看命一掌金和解	一行禪師作	一冊	正價貳拾錢郵稅四錢

二十八宿祥解	宿曜經の註解	二冊	正價八拾	錢郵稅八錢
歡喜天宛誓傳	聖天尊御由來	一冊	正價貳拾貳錢	郵稅四錢
明惠上人御傳記	并に御遺訓	二冊	正價四拾	錢郵稅六錢
菩提心の光	菩提心論の新註	一冊	正價貳拾	錢郵稅四錢
辨財天利益和讃鈔	平かな附靈驗を記す	三冊	正價五拾	錢郵稅八錢
眞言十卷章	弘法大師著	十冊	正價壹圓參拾	錢郵稅拾貳錢
即身義	弘法大師著	一冊	正價拾五	錢郵稅貳錢
二教論	弘法大師著	二冊	正價參拾	錢郵稅四錢
秘藏寶鑰	弘法大師著	三冊	正價四拾五錢	郵稅六錢
心經秘鍵	弘法大師著	一冊	正價拾五	錢郵稅貳錢
菩提心論	龍猛菩薩著	一冊	正價拾五	錢郵稅貳錢
續々宗義決決集	十卷章口決	五冊	正價壹圓六拾	錢郵稅拾貳錢
冠導眞言名目	廣安恭壽住	一冊	正價貳拾	錢郵稅四錢
三教指歸	弘法大師著	一冊	正價拾八	錢郵稅四錢
冠註十住心論	東大寺如實住	十冊	正價六圓	圓郵稅貳拾錢
三義指歸假名付	かな付	一冊	正價拾五	錢郵稅貳錢

性靈集	大本弘法大師作	五冊	正價壹圓貳拾	錢郵稅八錢
性靈集	小本同	三冊	正價四拾五錢	郵稅六錢
性靈集假名付	かな付同	三冊	正價五拾五錢	郵稅八錢
作持門詞句要集	沙門旭雅註	一冊	正價貳拾	錢郵稅四錢
教誠律義首書	沙門道宣著	一冊	正價貳拾	錢郵稅四錢
教誠律義指要鈔	沙門遍玄法註	一冊	正價貳拾五錢	郵稅四錢
悉曇和語連聲編	悉曇を解く	一冊	正價拾六	錢郵稅四錢
悉曇	沙門澄禪著	六冊	正價壹圓貳拾	錢郵稅八錢
住心品六卷疏	大日經住心品註	六冊	正價壹圓五拾	錢郵稅拾六錢
魚山薇芥集	聲明本	一冊	正價四拾	錢郵稅八錢
四座講式	涅槃 遺教 舍利 羅漢	二冊	正價四拾	錢郵稅四錢
密宗安心教示章	榮嚴和尚著	一冊	正價參拾五錢	郵稅六錢
秘藏記	密教秘密の深意	二冊	正價六拾五錢	郵稅六錢
顯密威儀便覽	顯教及密教に用ゆる法衣等其他を記す	二冊	正價參拾	錢郵稅四錢
六物圖	法衣の事を記したり	一冊	正價拾六	錢郵稅四錢
六物圖述義	楠濤龍師述	二冊	正價四拾	錢郵稅六錢

彼岸辨疑	彼岸の由來	二冊	正價貳拾五錢	郵稅四錢
大黑天神像考	大黒天の由來	一冊	正價拾	錢郵稅貳錢
遠羅天釜	白隠禪師の法語	三冊	正價五拾	錢郵稅六錢
文覺十人行狀記	文覺上人一代記	三冊	正價四拾	錢郵稅六錢
長明發心集	鴨の長明著雜話	五冊	正價壹	圓郵稅拾貳錢
地藏和讃兩寶鈔	地藏和讃の由來	二冊	正價參拾	錢郵稅四錢
妙見經和訓圖會	平かな付書入	三冊	正價五拾	錢郵稅六錢
中將姫行狀記	降誕の始めより終迄	四冊	正價六拾	錢郵稅八錢
因果經和談圖會	平かな付書入	六冊	正價壹	圓郵稅拾貳錢
聖德太子傳圖會	平かな付書入	六冊	正價壹	圓郵稅拾貳錢
念佛醍醐編	念佛の由來	三冊	正價參拾五錢	郵稅六錢
行基菩薩行狀記	平かな付	一冊	正價貳拾	錢郵稅四錢
釋教玉林和歌集	諸大徳の和歌集	一冊	正價拾八	錢郵稅貳錢
九想詩諺解	書入かな付	二冊	正價參拾五錢	郵稅四錢
法藏心經畧疏	法藏の心經註	一冊	正價貳拾	錢郵稅四錢
立華早稽古	池の坊流	一冊	正價拾貳	錢郵稅貳錢

●五部秘經 大形點付 全部十五卷 正價六圓五拾錢 小包料五拾錢  
 大日經、金剛頂經、蘇悉地經、要略念誦經、瑜祇經、全部十五卷



